

Wave

美術館だより
vol.30
JULY 1 2019

特集

インタビュー

松隈洋さんと新潟の建物を歩いてみた
ザ・コーザ “みる” だけじゃない美術館



草間彌生《自画像》1995年

特集 ザ・コーザ

“みる”だけじゃない美術館

新潟市美術館では、美術と美術館の楽しみを深めていただくため、講演スタイルの「美術講座」のほか、小中学生向けの「子ども講座」、大人向けの「実技講座」をそれぞれ年2回程、開催しています。

コーザ、4つのこだわり

1
新潟市美術館でしか
できないことをする！
展覧会の鑑賞を活かした創作活
動を提案したり。ときには、前川
國男設計の建築や、学芸員の仕
事もネタにしたり。

2
魅惑的な
講座名を
付ける！

4
子どもが楽しいことは、
大人も楽しい！
逆に、「子どもだまし」は通じない
と年々実感。2019年度は、ついに
「子ども講座」と「実技講座」の垣
根を取り払うことに挑戦します。
ご期待ください！

3
参加者同士で
発見を共有し、
刺激を与え合える
ひとときを
大切にする！

(担当学芸員 上池仁子)



ザ・コーザ

これまでの特色ある
プログラムをご紹介

実技講座

樹と出会う —おとなのためのネイチャーゲーム— 2016年6月5日(日)

西大畑公園から「海の庭」、みどりの小径を抜けて「山の庭」へ。新潟市ネイチャーゲームの会の指導員の皆さんを講師に迎え、前川国男がこだわったという植栽に目を向けたプログラム。普段なかなかない体験に、おとなのみなさんも童心にかえる時間となりました。



「目隠しイモシ」や「ゾロゾロ」
足の裏にも木の根を感じる!?

目隠しをして樹に触れてみます。
葉っぱや幹の感触、香りや
梢のざわめきにも感覚を研ぎ
澄ませて。

実技講座

彫る・摺る・みる 多色刷木版画教室 2017年3月5日(日)・19日(日)

刷り師の木村希八さんを取り上げた展覧会、「広重ビビッド」展、二つの版画展に合わせて、本格的な3版刷木版画に挑戦しました。



講師の木版画家・たかだみづみさん。終始にこやかに指導してくださいました。

実技講座

文字を味わう 魯山人の眼、魯山人の手 2017年7月9日(日)

「北大路魯山人展—美・食の巨人—」に合わせて、書家の華雪さんによるワークショップを実施! 目と手を通して「書」の魅力に迫りました。



まずは臨書で文字の「特徴」をつかみ、その心を読み解きます。



魯山人と良寛が書いた「天上」を見比べながら、華雪さんとともに鑑賞。



さまざまな解釈にもとづく「天上」ができあがりました。

冬の
こども講座

光をえがく 2017年2月18日(土)

「山の庭」に臨む大きなガラス窓をキャンバスに、「光」のイメージを表現。
落葉したブナが立ち並ぶガラス越しの風景が、カラフルなテープやセロファンで鮮やかに彩られていきました。



最初にコレクション展「光を想う」をみんなで鑑賞。作品の中の光の表現に注目しました。



夏の
こども講座

たんけん!美術館 2017年8月17日(木)

美術館のひみつを探りにいこう! クイズ形式で美術館の裏側を知る、おとなもこどもも楽しめる人気企画♪

へじゅじゅん! / ここでクイズです!

Q なんでここに坂があるの?

- 1 もともとあったから
- 2 下りが楽だから
- 3 館長の好みだから



このシャッターはいったい...!

- 1 もともとあったから



お外に出ました! ふむふむ、こういう道を通して作品が運ばれてくるんだね。

子どもスタンプカード

中学生以下の子どもたちを対象にスタンプカード配布中! 来館ごとにスタンプが1つたまり、子ども講座参加時にはボーナススタンプも。4つたまるまでステキな景品と交換できます。景品はその時々で変わります。お楽しみに! (担当学芸員 松本美樹)



Lounge Nのきままな実験。

「いつでもだれでも」「やってもやらなくても」OKの申込要らずの小さな小さなワークショップ、その名も「きままプログラム」。2015年のリニューアルを機にスタートして、はやくも17回目となりました。ものを作ったり描いたりすることは、それだけでとても楽しいけれど、その「手」を介して他者の表現に出会い、コミュニケーションが広がっていくといいなと願いながら毎回回恵を絞っています。アイデアをお持ちの方はぜひ、美術館協力会にご入会の上、ご参加をお待ちしています! (担当学芸員 荒井直美)



毎回大人気の〈みんなでつくる☆クリスマス〉。裸のツリーがこんなになってしまうなんて。もちろん今年もやりますよ!

〈どんどん つむつむ タワーをつくらう〉
なかなかおうちではこんなにできないよね。おとなもこどもも夢中になってしまいます。

教育機関としての バウハウス

この夏の「きたれ、バウハウス」展(8/3～9/23)は、今日のアート／デザインに大きな影響を与えたドイツの総合造形芸術学校「バウハウス(bauhaus)」を紹介する展覧会です。2019年は、この学校がドイツ・ヴァイマルに創設されてから100年目に当たる記念すべき年。あらためてその意義を見つめる一年として、ドイツ本国を初めとし世界各地で関連プロジェクトが行われています。日本でも「bauhaus100 japan」の名のもと様々な企画が展開されますが*、その目玉となるのがこの「きたれ、バウハウス」展。当館を皮切りに全国5会場に巡回します。今回の展覧会が従来のバウハウス展と異なるのは、「学校」という側面に特にフォーカスしていること。バウハウスの教師陣には、パウル・クレーやヴァシリー・カンディンスキーら前衛的なアーティストが名を連ね、従来のアカデミックな美術教育とは180度異なる手法を試みました。その“とんがった”カリキュラムに、日本を含む29を超える国々から意欲的な学生が集い学んだのです。会場では、当時の学生たちが実際に挑んだ課題が皆さんを待ち受けています。「マッチ4本を用いて、1分間で何通りの図形が作れますか?」「色のついた

(担当学芸員 星野立子)

*公式ウェブサイト(www.bauhaus.ac/bauhaus100/)で一連のイベント「バウハウスの星座」をCHECK(Twitter, Facebookもあります)。



ヨースト・シュミット
《1923年のバウハウス展ポスター》
1923年 ミサワホーム株式会社所蔵

影は、どうやったらできるでしょう?」等…。あらゆる芸術に応用可能な造形の基礎を学ぶことをねらいとする問いの数々に出会うでしょう。ボランティアの方々と一緒に実際に手を動かして試せるコーナーもあり、体験入学するように楽しんでいただけます。先入観に捉われない自由な創作を育んだバウハウス流の教えと学びは、いまでは世界の造形教育の基礎にもなっています。勿論、これぞバウハウス!といったグラフィック、家具等のプロダクトも多数並びますから、造形教育がどのように結実したかという視点で、モダンデザインの世界に浸ることができるでしょう。世代も、美術の得意／不得意も問わない本展は、バウハウスが掲げた理想のように、すべての人に開かれています。きたれ、新潟市美術館へ!

(担当学芸員 星野立子)

コレクション展のみどころ!!

コレクション展Ⅰ SUMU -すむ- あなたのうちはどこですか

4月23日(火)→8月4日(日)

ひとの〈すまい〉について考えていたら、所蔵品からいろいろな「建物」を引き張り出すことになりました。神様のために建てた宗教的建造物は、その時代・その文化の最高の知恵と技術を用いた、理想の家を体現しています。思いがけずたくさんの世界遺産も出てきました。その紹介もしていますのでちょっとした世界旅行気分が味わえます。あなたにとって究極の住まいってなんですか。

(担当学芸員 荒井直美)

コレクション展Ⅱ 抽象の快楽、具象の誘惑。

8月9日(金)→12月1日(日)

一般的には相反する心的作用として説明される「抽象」と「具象」。20世紀以降、造形表現の実験的な取り組みから生み出された様々な作品を通して、それぞれの魅力や通じ合う要素を、いくつかキーワードを手掛かりに再確認します。パウル・クレーの《ブルンのモザイク》や三尾公三の《画室の女》も久しぶりにお目見え。会期の重なる「きたれ、バウハウス」や「アンドリュー・ワイエス展」とも合わせてお楽しみください。

(担当学芸員 松沢寿重)

コレクション展Ⅲ かわいい!かわいい?

12月6日(金)→2020年4月5日(日)

愛らしい子どもや動物たちは、誰にとってもかわいいでしょう。それでは、やわらかい素材感や明るい色合いの作品はどうでしょう。小さなサイズや丸みのあるかたちも、なんだかわかい気がします。さらに、ちょっと不気味な生き物も「キモカワ」と称され「かわいい」の範疇におさまっています。私たちが「かわいい!」と思うものはどんなものなのでしょう?あらゆるものを包み込むこの言葉から、多彩な魅力を探ってみましょう。

(担当学芸員 松本美術)



芸術の秋に
むけて
準備中です。

丸沼芸術の森所蔵

アンドリュー・ワイエス展 オルソン・ハウスの物語 11月2日～1月19日

アンドリュー・ワイエス(1917-2009)というアメリカの国民的画家をご存知でしょうか?美術がお好きな方は、学生時代に美術の教科書で知ったり、どこかの展覧会で見たことのある方がいらっしゃるかもしれません。

ワイエスは、生まれ故郷であるペンシルベニア州と、夏の家があるメイン州を行き来し、そこで生活を営む人々の姿や風景を克明に描き続けました。ワイエスは夏の家を訪れてはオルソン・ハウスへ赴き、クリスティーナとアルヴァロの姉弟とともに過ごしています。ニューヨーク近代美術館の《クリスティーナの世界》はまさにこの地で描かれました。当館での展示は秋からですが、2019年3月16日(土)から5月19日(日)まで、東京・新宿の美術愛媛館にて「アンドリュー・ワイエス展」が開催されました。4月21日(日)には、作品を所蔵している丸沼芸術の森代表・須崎勝茂氏による講演会「アンドリュー・ワイエスとの出会い」が行われ、作品を所蔵するきっかけや、ワイエスとの親交についてお話を伺いました。作品がどのような経緯を辿り、所蔵者の手に渡ったのか。その後、どのように活用されていったのかを知ることで、作品の価値や意味を改めて考える機会となりました。作品調査や講演会への参加を踏まえて、当館での関連イベントも企画中です。アメリカ美術という枠組みでワイエスを見つめ直したり、ワイエスと縁のある方からお話を頂いたり…多角的にワイエスを知り、語らう場を設けることで作家や作品を身近に感じて頂ければと思います。

(担当学芸員 児矢野あゆみ)

■今年度の展覧会

★インポッシブル・アーキテクチャー もうひとつの建築史
4月13日(土)→7月15日(月・祝)

★バウハウス開校100年
きたれ、バウハウス —アート／デザインの原点—
8月3日(土)→9月23日(月・祝)

★第51回新潟市美術館
10月9日(水)→10月13日(日) 前期
10月16日(水)→10月20日(日) 後期

★丸沼芸術の森所蔵
アンドリュー・ワイエス展 オルソン・ハウスの物語
11月2日(土)→2020年1月19日(日)

★蔵出しコレクション
草間彌生+アメリカに渡ったアーティストたち
2020年2月8日(土)→4月12日(日)

編集後記

本号では当館における近年の「教育普及」に注目しました。振り返ってみると、「鑑賞」と「創作」をセットにしたプログラムが多くなったことに気がきます。この二つが不可分なかたちで合わさることで「鑑賞」はより深まり、展覧会が人の心に残るのではないのでしょうか。自分の見方を知り、参加者同士の交流を通して新たな価値観を創造する。様々な角度から作品と向き合う「コーザ」でもって、より多くの方が美術と親しむ機会を設けていきたいと思います。

(学芸員 児矢野あゆみ)

表紙 | 作品と作家⑩

《自画像》1995年

草間彌生 くさまやよい(1929～)

エッチング 平成8年度寄贈
(木村希八コレクション)



草間彌生(1929～)の創作の源泉は、幼少期からの幻覚にあります。他人と共有できない感覚世界を抱え、恐怖と向き合う手段として、それらを描き留めることから草間の絵画は始まりました。とりわけ、幼い彼女を悩ませ、やがて強烈に魅了することになったのが、同一モチーフが増殖し、周囲と自らを埋め尽くしていくという幻覚でした。「クサマ・ワールド」の代名詞である「水玉模様」や「無限の網」も、「実体験」を美術表現へと昇華したもののなのです。1979年以来、草間は400種以上の版画を発表しています。本作は、新潟県南魚沼出身の版画刷り師・木村希八と共に、自伝的なテーマでエッチングに取り組んだシリーズの1点です。鉄筆で描かれた線描に「生命を育ませる」ため、木村は刷り工程に工夫を凝らしたといいます。前景には、髪も肌も「水玉」に覆われた横顔。口元に微かな笑みを湛えて、自らの内面世界に思いを馳せるかのように、眼は上へと向けられています。背後には、蜘蛛の巣状の網目が折り重なり、今にも画面の余白を埋め尽くさんばかりに蠢いています。増殖するモチーフと、複製が前提となる版画。表現と技法の両面で、草間の幻覚を追体験させるような作品です。

(担当学芸員 上池仁子)

■アクセスマップ



■開館時間

午前9時30分～午後6時
(2020年2～3月は、午前9時30分～午後5時まで)
※観覧券の販売は開館30分前まで

■休館日

月曜日(祝日または振替休日の場合は開館)、展示替期間
詳細はチラシや美術館ウェブサイトをご覧ください。

■交通案内

バスで「古町」下車、徒歩10分



新潟市美術館

〒951-8556 新潟市中央区西大畑町5191-9
TEL. 025-223-1622 / FAX. 025-228-3051

www.ncam.jp



新潟市美術館



松隈洋さんと新潟の建物を歩いてみた



宮川英二・加藤渉（新潟市体育館）1961年



佐藤武夫（新潟県民会館）1967年

interview

建築という船

松隈洋さん（京都工芸繊維大学教授）は、1957年兵庫県生まれ、1980年前川國男建築設計事務所に入所、2000年に京都工芸繊維大学に転じ、DOCOMOMO Japan などでの近現代建築の保存活動や、建築展の企画など、幅広い活動を展開している。今年4月には『建築の前夜 前川國男論』（みすず書房）で日本建築学会賞（論文）を受賞した。当館企画展『インボッシブル・アーキテクチャー もうひとつの建築史』（4月13日～7月15日）では、前川國男《東京帝室博物館コンペ案》（1931年）の模型化を監修していただいている。会期中の講演のための来新の機会に、市内に残る半世紀前のモダニズム建築をご案内した。率直に、明快に、情熱的に、縦横無尽に語られたお話の、これはほんの一部。

2019年4月15日、時おり激しい雨の降った、新潟市中央区・白山公園界隈にて 文責：藤井素彦（新潟市美術館学芸員）

新潟市体育館にて

—— 1964年の新潟国体を機に建てられたものです。設計は日本大学理工学部駿河台校舎5号館（1959年）などを手がけた宮川英二、1960年に竣工しています。新潟県内でDOCOMOMO Japan（松隈さんは前・代表理事）の「日本におけるモダン・ムーブメントの建築」に選出されているのは、こちらと糸魚川の《善導寺》（渡邊洋治、1961年）の2件、この体育館は2005年に選ばれました。

《駿府会館》（丹下健三、1957年、現存せず）みたいなHPシェル（双曲放物面）構造ですね。大規模構造体で大空間を覆う「構造表現主義」の建築が、全国で競いあうように建てられた時期のもの一つですが、今も良い状態で残っているものは少ないかもしれません。

—— この屋根・天井は、一枚の四角い布の、向かいあう二つのカドをつまんで、持ちあげたようなかたちですね。竣工時の『新建築』（1961年1月号）によると、地盤沈下と雪の影響を考えて、建物の自重を軽くするためにHPシェルを採用したようです。

雨仕舞や音響効果のために、非常に微妙な三次元曲面をつくっています。1960年当時、これを施工するのは、本当に大変だったと思います。足場が取れるまで心配だったかもしれません。全体の姿が現れた時は、爽快だったでしょうね。

—— 50分の1の模型をつくって、設計者から職人さんまで、現場の全員が細部まで頭に入れるように努めた、という話です。

まだ職人の技が残っていたころだから、あちこちに手づくりっぽいいところがあって、細部の物質感、モノとしての存在感が強い。この客席は、分厚い一枚板で、教会のベンチみたいに長い幅につくってあります。しっかり使われて、ちゃんと年月を刻んできた感じがとても良い。よく維持されていますね。来年は竣工60周年ですよ。

—— 建物の歳のとおり方にも注意を払っておられますね。

建築に愛着を感じるきっかけって、全体の空間だけではなくて、階段の手すりの感触とか、こういう椅子の座り心地とか、身

体的なものだと思います。ここでプレイした人たちが、それを見に来た人たちのことを、この椅子が記憶してくれている感じですよ。こういうことが、今の建築ではどのくらい起こるのか。触って、なじんで、親しんで、愛着を持てる、そういう施設になっているのか。不安に思うことがあります。



これを施工するのは、本当に大変だったと思います（新潟市体育館にて）

余談：新潟市体育館は、ジャズ批評家・間章がプロデュースした伝説の音楽イベント「自由空間」（1972年4月29日）の会場にもなっています。インターネットで「間章 自由空間」を検索してみてください。

新潟県民会館にて

—— 1967年の竣工です。旧新潟市庁舎（1958年、現存せず）など全国で県庁や市役所、ホールを手がけた佐藤武夫が、4者指名コンペで選ばれています。

コンクリートで打った壁をノミとハンマーでハツってますね。この天井高で、床から上まで、ぜんぶ職人による手ハツリ。しかも、リブ状の筋の、畝のような凸部だけハツつて、凹部は残している。こういう細かい仕事を、この規模でやっている。すごい。

—— 気が遠くなるような、果てしない仕事ですね。

ポール・ルドルフにも、ハツリを入れた作品があります。冷たく無表情になりがちな打ち放しコンクリートに、いろんなテクスチャーをつけたっていうことだったんですね。それとね、このハツつたところに見えている、骨材の丸い自然石。いまコンクリートの骨材は、ぜんぶ碎石になっちゃってる。もう丸石は採れないんです。これは貴重ですよ。

きたらいいですね。のど自慢大会みたいに「こんなのあるぜ」って。たとえば「新潟建築自慢」ですよ（笑）。べつに有名な建築家の作品でなくてもいいんです。

—— 今もあちこちで、大切な建物が消えていっています。

建築の寿命が、人間よりも短くなっていること自体がおかしいんじゃないでしょうか。人間が生きる時間より長い時間、建築があることによって、いろんな文化や思想が次の時代に継承されていく。建築って、パトンのような存在ですよ。

—— そんな建物からは、教科書的な建築史とは、違うものが見えてきますね。

最近、「再帰性」という言葉がひっかるんです。何度も検証するなかで、建築史の絵柄自体が動いて、別な構図が見えてくる。前川國男にも、忘れられそうになっていた時期があります。しかし、いま見直すと、誰がいちばん遠くまで届くことをやっていたのか。歴史の地と図の関係が変化していく、そのことの豊かさ、面白さが大事です。



ぜんぶ手ハツリ。すごい仕事ですよ（新潟県民会館にて）

—— 上のホールの方に行ってみましょう。

この吹き抜けになった階段室は、壮観だなあ。壁面は無数の細かいブロックで、その一つ一つに色ガラスが入ってる。まるで教会のような緊張感がありますね。無駄にも思える空間で、今では絶対につくれない。今も普段使いされている、オリジナルのソファも素敵ですね。

—— 若い建築家の仕事をどうご覧になっていますか。

70年代以降のことですが、アートの方向に道が開いてしまった。建築が永く使われるためには何が必要なのか、みんなが納得できる普遍解に挑まずに、作家性や新しさばかり求めている。建築そのものが発信するということより、誰がやったのかということの方が前に出てしまう。華奢で、非常に傷みやすい建築が多くなっています。どうやったら、自分たちの建築も上手に歳を重ねることができるのか、建築が大切にされるためには、どういうことが必要なのか。50年前の建築を見ることは、今ついている建築の50年後を予想することでもあります。最前線で活躍している建築家たちにも、モダンイズム建築と向きあってもいいと思います。

—— デザインだけの話ではなくて、もっと原理的なことです。

ぼくの世代くらいまでは、ポスト・モダンの激流に相当りまわされましたね。古い考え方を変えれば建築はもっと豊かにな

—— こちらが大ホールです。

ここの大きな壁面も、ぜんぶハツつてある。職人さんにとっては、やり甲斐がありすぎるほどの仕事ですね。でも、その手仕事の熱量が今も生きている。板張りの天井の、波打つような曲線もすごい。

佐藤武夫の作品として、絶対に凡作ではない。ものすごく力が入った建築です。佐藤武夫の大ファンっていう人がいてほしいですね。「みんなが知らない建築を、私がいちばん知っている」みたいな。展覧会にしてみたらどうですか？（笑）今でできることの良さもあるけど、今の建築にはできないことも見えてくる、そういう機会が増えるといいと思います。

見学後、喫茶店にて

—— お疲れさまでした。壁面や家具といった細部に手を触れながら、とても楽しそうにいらんなっていったのが印象的でした。

今日見せていただいたような、それぞれの地域に残る建築を、市民レベルで応援で

るというふうに、モダンイズムを全否定したわけですよ。でも、前川國男が考えぬいたように、鉄とガラスとコンクリートで、王様や富豪でなく、みんなが普通に使う、私たちの生活の環境そのものをつくっていく、そういうことを主題化したのが、モダンイズム以降の建築だと思っています。みんなが共感できる、愛着を持って永く使ってもらえる、いい建築をつくる。近代だろうが現代だろうが、このテーマは変わりません。建築は、この船から降りることは絶対にできないわけですよ。

結局、人間が好きか嫌い、みたいな話ですよ。その建物を使う人たちを、愛しているかどうか。吉村順三は、「日暮れどき、「自分が設計した」一軒の家の前を通ったとき、家の中に明るい灯がついて、一家の楽しそうな生活が感ぜられるとしたら、それが建築家にとっては、もっともうれしいときなのではあるまいか」（『建築家吉村順三のことは一〇〇 建築は詩』彰国社）と言っています。そういうことなんですよ。そういうことが、いま希薄になっているような気がします。その意味でも、先人たちの残した建築との対話が、切実に求められている時代だと思います。



「文化、ふっと新潟!」、 国文祭・障文祭のこと

前山裕司 新潟市美術館館長

今年は新潟県で「第34回国民文化祭・
にいがた2019」と「第19回全国障害
者芸術文化祭にいがた大会」が、9月15
日から11月30日まで開催されます。

ところで「国民文化祭」を知っていま
すか? いきなり失礼な問いかけをしたの
は、平成26年度のある調査報告書(注)を
見たからです。アンケートでは、「名称を聞
いたこともない」が63・1%という結果で
した。「名称くらいは聞いたことがある」
が31・1%。つまりほとんど知らない人が
約94%。この調査結果は、大きく予想を
超えていて驚きました。

先日、家の片付けをしていたら、第1回
国民文化祭の「参加章」と書かれた箱が
出てきました。ふたを開けるとロゴマー

ク付きの爪切りで、短歌を出品してほし
いといわれている、と義母が話していたこ
とを思い出しました。

1986年の「第1回国民文化祭・
東京」は、当時の三浦朱門文化庁長官の
肝いりで始まった、国体に似た文化事業
でした。調べると、会場はNHKホール。
ポスターデザインは亀倉雄策さん、ほか
に福田繁雄さんの個別事業のポスター
があったことなどがわかりました。美術
展は「第14回サロン・デ・ボザール展」と
いうアマチュア公募展が、国民文化祭の
事業とされたようです。

国民文化祭(国文祭)という構想を聞
いたとき、私も含めて、多くの美術関係
者の反応は冷ややかだったように記憶し

害者週間にあわせる障文祭の期間が、
企画展を4月から5月に組んだことで、
2011年4月から12月までという過
去最長になったといわれた記憶がありま
す。ただ、4月に予定していた大会の開会
式が、東日本大震災のために中止になっ
たこと、その後の計画停電やさまざまな
ことが記憶に強く刻まれています。が、本
論から離れるので触れません。

ことでしょう。もともととはそれぞれ別な
開催地で持ち回り開催してきたのです
が、奈良大会で初めて一体開催となりまし
た。私が考えるその意義は、国文祭・障文
祭の事業が混在していることで、ごちゃま
ぜの状況が誕生する可能性が開けたこと
です。将来、国文祭に障害のある人がどん
どん参加するほど境界が低くなれば、いつ
の日か渾然一体とした文化の力オスが生
まれるような夢が広がります。国文祭も、
アマチュアの文化祭の中にびつくりする
ような表現が投げられることで、大きな
刺激を受けるのではないのでしょうか?

これまで様々な障害者アートの展覧
会企画に関わってきたため、何度か新潟
県の障文祭の会議などに呼ばれ、言いた
い放題してきたのですが、その結果、
障文祭の展覧会に関わることになりま
した。障文祭を新潟で行えるせっかくの
チャンスですので、できるだけ街に開いて
いけるようなことを考えたいと思い、新
潟市中心部の、美術館でない会場でやれ
ないか、探しているところです。障文祭を
知らない人や、初めて触れるような人た
ちにも、ぜひ見てもらえるようなものに
なればと願っています。

阿部展也展 「優秀カタログ賞」を 受賞!

前号の『WAVE
vol.29』でもご紹介
した「阿部展也—
あくなき越境者」展
が、2018年美連協
大賞「優秀カタログ
賞」を受賞しました。



この賞は全国公立美術館の連携組織であ
る美術館連絡協議会で設けられている奨
励制度で、「複数の学芸員の論文、解説が
掲載されているカタログを対象に、構成、
論文、解説などを総合的に判断して、最も
優れたカタログを選定する」とされているも
のです。新潟市美術館は今回がお初の受
賞となりました。

「カッコいい!」と評判だったのは大溝裕さ
んによる表紙デザイン。雁垂れの折り返し
まで目一杯のレイアウト展開はまさに越境
的。そして、その表紙図版に起用した作品
は、昨年9月に急逝された斎藤敦さん(本
誌vol.27にご登場)の手によって修復され
たものでした。

苦心^{さんたん}惨憺^{ごもごも}、悲喜交々…様々な想いがぎっし
りと詰まったカタログは、当館ミュージアム
ショップ「ルルル」(店頭・オンラインショッ
プ)、GINZA SIXの銀座蔦屋書店で販売中
(税込2600円)です。

(当館副参事/学芸員 松沢寿重)



第1回国民文化祭の参加章